

上東門院彰子サロン

—文化を湧出する場の女房たち—

* 諸井彩子

はじめに

撰関期の文学について論じるにあたって、担い手であり享受者でもあった女房たちの存在を無視することはできない。そしてその女房たちの活動は、主人と女房集団を核として構成され、歌合などの開催のほか、対外的・対内的に文化的な営みが行われる場としての「サロン」と密接に結びついていた。

後宮を中心としたサロン活動の成果としては、『枕草子』などサロン活動自体を記した作品⁽¹⁾、歌合などの歌人の活躍の場が挙げられる。物語作品の直接の成果として天喜三年（一〇五五）禊子内親王物語合で披露された十八の物語があるほか、後期物語がサロン活動に影響を受けたことは明らかである。多くの散逸物語の制作もサロンと密接に関わっていたと考えられ、『源氏物語』にも彰子周辺のサロン活動が影響を与えていた可能性が高い⁽²⁾。『栄花物語』も、女房たちのネットワークがもたらした作品とみなすことができる⁽³⁾。

広く知られているように、上東門院彰子のもとには名だたる女房が出仕し、一大サロンを作り上げていた。このサロンについては酒井みさを氏がその所属メンバーを挙げて論じているが、活動が明らかになっていない現状があり、サロンそのものの評価は低い。確かに彰子サロンでは、彰子自身が主導した例は目立たず、歌合などの記録も少ない。しかし、大斎院選子内親王や定子のサロン活動として挙げられる日常の風流な営みは彰子サロンでも見られ、その点で彰子サロンが劣っていたとはいえない。本稿は、彰子サロンの活動とその特徴について、女房集団の営みという視点で論じることが目的とする。彰子サロンに注目することで、道長から頼通の時代における、女性が担った文学活動を考察する一端としたい。

なお、和歌は新編国歌大観、散文作品は新編日本古典文学全集によった。

一、サロンにおける女主人のあり方

撰関期のサロンにおいて、主要な構成員である女房集団を選ぶのは、女主人ではない。サロンの主人には誕生とともに乳母がつけられるが、また幼い間の女房集団は両親の女房集団と一体化している。入内、結婚等を契機に、両親やそれに準じた保護者によって女房が集められ、女主人独自の女房集団が形成される。基本的に当時の女房集団はこの繰り返しで形成されていた。従って、サロンの形成当初は乳母やそれに準じた両親の代からの女房がリーダーとして存在し、女主人が強い指導力を発揮することはまれだったと考えられる。

選子内親王も和歌の詠作において常に強い指導力を発揮していたわけではない。『大斎院前御集』では、選子内親王の言動や与えられた歌題によって女房が歌を詠む例もみられるが、基本的には宰相・馬・進らの集団指導体制が貫かれており、傍線部のように当時二十代の選子内親王は女房の行動を追認する立場であった⁽⁶⁾。

なまゆふぐれに山にかすみいとみじうたちたり、かすみかけぶりかなど
いへば、宰相

いつしかとかすみもさわぐ山べかなのびのけぶりのたつにやあるらむ（二）
むま

かすがののとぶひののもり心あらばけふのかすみをため（一）はせよ（三）
進

はるひやく山のかすみてけぶれるはみねのこのめやもえいでぬらむ（四）
これをのちにきこしめして

野辺ごとにかすみははるのさかなればたちいでて見ねどそらにしりにき（五）
それは、『出羽弁集』によって永承六年（一〇五二）の春から秋までの歌を残す、

〔キーワード〕藤原彰子／サロン／女房／物語／私家集

*平成一七年度生 国際日本学専攻

当時二十七歳の章子内親王の女房集団にも共通している。

・ せじどの、なほ人人のおもたまへらんことどもすこしばかりきかむなど
せめたまへば、まづさらばいかがときこえしかば、おぼえけることを

あまのがはあさくもあらばたなばたにこのおとたかきみづをかさばや (五五)

大納言の君

あさかぜのすずしく今日はたなばたのかさねやすらんあまのはごろも (五六)

山と

いかりながきちぎりをむすびけんそらにたえせぬたなばたのいと (五七)

じじうの命婦

たまみだるうはばのつゆはたなばたのたえせぬいとにぬきとめて見む (五八)

またれいのみないひとられたてまつりて、物もおぼえずぞ

そこきよきいづみの水にうつつしてぞほしあひのそらもことに見えける (五九)

章子内親王の姿は描かれず、女房集団のリーダー「せじ殿」の促しで他の女房が歌を詠む。この「せじ殿」は、章子内親王の母、威子の中宮宣旨を務めた女房で、章子内親王の乳母でもあり、章子内親王の中宮宣旨をも務めた。⁷⁾

このように、当時のサロンは女房がリーダーシップをとる場合が多い。『枕草子』には定子自身が強い指導力を発揮している様子が描かれるが、むしろこれは例外的な女主人のあり方であったろう。女主人が強力なリーダーシップを発揮するか否かという尺度では、当時のサロンの営みの全貌を捉えることはできないことがわかる。

彰子サロンの評価が低い理由に、『紫式部日記』での同僚女房批判が挙げられる。

上臈中臈のほどぞ、あまりひき入りさうずめきてのみはべるめる。さのみして、宮の御ため、もののかざりにはあらず、見ぐるしとも見はべり。

出自の高い彰子女房の中には実務的に頼りない人もいたらしい。たとえば中宮大夫藤原斉信との取り次ぎが滞る様子が『紫式部日記』に記されている。

まづは、宮の大夫まゐりたまひて、啓せさせたまふべきことありけるをりに、いとあえかに児めいたまふ上臈たちは、対面したまふこと難し。また、あひても何ごとをか、はかばかしくのたまふべくも見えず。…下臈のいであふをば、大納言こころよからずと思ひたまふなれば、さるべき人々、里にまかで、局なるも、わりなきいとまにさはるをりをりは、対面する人なくて、まかだたまふときもはべるなり。

当時貴人は取り次ぎの女房を固定することが多く、頭中将であった時期に定子女房

の中では清少納言と親しくしていた斉信も、『紫式部日記』が執筆されたとおぼしい寛弘七年(一〇一〇) 当時は権大納言であり、下臈女房が取り次ぐわけにはいかないであろう。『紫式部日記』の船遊びの場面では、上臈女房の宰相の君(道綱女の豊子とみられる)が斉信の相手をしているのもそれを裏付ける。

目加田さくを氏は、紫式部の同僚女房批判から中宮時代の彰子サロンは大した活動をしていなかったと指摘するが、そのみから彰子サロンの活動を否定するのは早計というものである。後述する『紫式部日記』に見える寛弘五年(一〇〇八)十一月の御冊子作りは、道長の後見があったにせよ彰子の指示で行われたものであるし、『御堂関白集』には『紫式部日記』が書かれたのと重なる寛弘七年(一〇一〇)の妍子や道綱など血縁関係にあたる人物との交流だけでなく、選子内親王との贈答も多く残されており、サロン活動が行われていなかったとはいえないのである。

二、彰子サロンにおける道長と倫子の支援

彰子の女房集団を構成する核となっていたのも、道長倫子夫妻に仕えていた赤染衛門らベテラン女房であったとみられ、入内にあたって追加された女房たちは道長倫子夫妻の意向で選ばれた。ここでは、道長倫子夫婦が彰子の女房集団をどのように支援していたか述べていきたい。

(一) 道長の支援

『枕草子』に道隆と女房が和歌を詠み合う場面がみられないのと対照的に、道長が女房に歌をよく求めていたことは『赤染衛門集』によって知られるが、それは彰子女房に対しても同じであった。次の a b は『紫式部日記』、c は『和泉式部集』に見える道長との贈答である。

a 橋の南なるをみなへしのいみじうさかりなるを、一枝折らせたまひて、几帳の上よりさしのぞかせたまへる御さまの、いと恥づかしげなるに、わが朝がほの思ひしらるれば、「これ、おそくてはわるからむ」とのたまはするにことつけて、硯のもとによりぬ。

をみなへしさかりの色を見るからに露のわけきける身こそ知らるれ
「あな疾」とほほゑみて、硯召し出づ。

白露はわきてもおかじをみなへしころからにや色の染むらむ

b 源氏の物語、御前にあるを、殿の御覧して、例のすずろことども出できたるつ

いでに、梅のしたに敷かれたる紙にかかせたまへる。

すきものと名にし立てれば見る人の折らで過ぐるはあらじとぞ思ふ

たませたらば、

人にまだ折られぬものをたれかこのすきものぞとは口ならしけむ

めざましうと聞こゆ。

c ある人のあふぎをとりてもたまへりけるを、御らんじて、大との、たがぞ

ととはせ給ひければ、それがときこえ給ひければ、とりて、うかれめのあ

ふぎとかきつけさせたまへる、かたはらに

こえもせむこさずもあらん逢坂の関守ならぬ人などがめそ(二二五)

aは風流を好む道長の姿を記す好例、bcは、紫式部の作品及び和泉式部の評判をもとにしたものである。道長は彰子女房とその作品に大きな関心を持っており、道長自身がその才能を買い、積極的に彰子女房として出仕させた可能性が指摘できる。

また、道長は物語の流行をいち早く取り入れようとした。既に『大斎院前御集』には、選子内親王の指示で「歌司」や「物語司」と呼ばれる役職が作られ、和歌や物語の蒐集が行われていたことが明らかにされている。また、『栄花物語』によれば、道長の兄である道兼は、まだ生まれていない娘のために絵物語を集めていたという。そのような時代の流れの中で、『赤染衛門集』によれば、道長にも物語が献上されていた。

とのに、はなざくらといふものがたりを、人のまゐらせたるつつみがみに

かいたる

かきつむる心もあるをはなざくらあだなる風にちらさずもがな(一六六)

返しせよとおほせられしかば

みる程はあだにだにせず花ざくらよにちらんだにをしとこそ思へ(一六七)

「はなざくら」という物語を道長のもとに贈つてよこした人に対して、赤染衛門が返歌をしたものである。『源氏物語』の一部が、このような形で道長のもとに献上された可能性も否定できない。

献上されるだけではない。『赤染衛門集』には次のような物語制作歌群がある。

との御前、ものがたりつくらせ給ひて、五月五日あやめ草をてまざぐり
にして、けちかうみるをむなつしをとて

我が宿のつまとはみれどあやめ草ねもみぬほどにけふはきにけり(一三六)

これがかへしせよとおほせられしかば

あやめふく宿のつまともしらざりつねをばたもとの玉をこそみれ(一三七)

けちかうなりてあかつきに、をとこ

こくからにしばしとつつむ物ながらしぎのはがきのつらきけさかな(一三八)

返し

百羽がきかくなる鳴のてもたゆくいかなるかずをかかむとすらん(一三九)

かかる事きこえて、すげなうもてなされて、ものなげかしげにて、をんな
いかにねてみえしなるらむあかつきの夢より後は物をこそおもへ(一四〇)

あらかじめ作られた絵と物語に合わせた歌を赤染衛門が詠んでいる。この歌群は寛弘三年(一〇〇五)以降に詠まれたもので、『源氏物語』執筆と同時期に、道長の主導で赤染衛門ら女房集団が絵物語を共同制作していたことが明らかになる。

『紫式部日記』によれば、道長は紫式部の局に置いてあった物語を全て妍子のもとに持って行ったという。サロンは作品の制作の場でもあり、発表の場でもあった。このように、道長は幼くして入内した彰子を文化的な面でも支援しており、女房集団もその意向に従うことが求められていたとみてよい。

(2) 倫子の支援

これまで倫子について文学の立場から論じたものはほとんどないが、『赤染衛門集』に見える倫子は風流を好み女房を気遣う理想的な女主人といえるのではないか。

a 一条殿校御覽じにわたらせ給ひしに、なやむ事ありて御共にまゐらざりし

かば、かへらせ給ひてちりたる花をつつみてたまはせたりしに

さそはれぬ身にだになげく桜花ちるをみつらん人はいかにぞ(一二九)

帥殿にしたしき人のゆかりしはえまゐるまじとんあるとききしかば、さ

とにあるはる、うへの御前のおほせ事にて花のさかりなるをみせまほしく

なんあるとおほせられたりしにまゐらせたる

もろともみるよもありし花桜人づてに聞く花ぞかなしき(一三〇)

さてまゐりたれば、にはにつもりたるをかきあつめて雪まゐらせむとてい
れたりしに

雪をこそ花とはみしかうちかへし花も雪かと思ゆる春かな(一三一)

aは同行できなかつた赤染衛門を気遣つたもので、bは、赤染衛門が藤原伊周の縁者であるとされて蟄居していた際に見せた気遣いである。bに似た状況が、『枕草子』の二三七段にある。定子は、道長側の人間だとされた清少納言に、「言はで思ふぞ」
とだけ書いて出仕を促し、再出仕しても控えめに伺候していた彼女を女房の輪の中に入れようと気遣つた。対抗勢力の側でもほとんど同じような出来事があつたことがわ

かる。この倫子の気遣いによって、赤染衛門は再び出仕することができたのである。
『紫式部日記』にも、紫式部を気遣った次のような場面がある。

c 九日、菊の綿を、兵部のおもとの持て来て、「これ、殿の上の、とりわきて、いとよう老のごひ捨てたまへと、のたまはせつる」とあれば、

菊の露わかゆばかりに袖ふれて花のあるじに千代はゆづらむ

とて、かへしたてまつらむとするほどに、「あなたに帰り渡らせたまひぬ」とあれば、ようなきにとどめつ。

d 「雪を御覧じて、をりしもまかであることをなむ、いみじくにくませたまふ」と、人々ものたまへり。殿の上の御消息には、「まろがとどめしたびなれば、ことさらにいそぎまかて、疾くまゐらむとありしもそらごとにて、ほどふるなめり」と、のたまはせられたれば、たはぶれにても、さ聞こえさせ、たまはせしことなれば、かたじけなくてまゐりぬ。

cはこの時期の彰子女房の中では年長である紫式部への気遣い、dは倫子が紫式部に消息を送り、早く戻るように促したものである。ここから紫式部の出仕に倫子の後押しがあった可能性も指摘されているが、いずれにせよ倫子は彰子の女房集団にも配慮する立場にあった。

このような女房に対する配慮の仕方は、当時人の上に立つ女性に必須の能力であったとみられる。職場における人間関係が重要なのは、今も昔も変わらない事実として興味深いが、もともと入内を望めるほどの出自をもつ倫子であるから、女主人としての統率力を若い頃から学んでいたのだろう。彰子はそのような能力を倫子から学び、女房の才能が発揮できるような場を提供しようとしていたのではないだろうか。例として『伊勢大輔集』(e)と『和泉式部集』(f)を挙げる。

e いづみしきぶ、あんにはじめてまゐりたりしに、ものいへ、とおほせられしに、はづかしきひとにこそさぶらふなれ、いかでか、など申ししかども、よもすがらものいひあかして、つとめて御まへにおこせたりし

思はむとおもひし人とおもひしにおもひしこともおもほゆるかな (八五)

とぞある。御ものいみにて、御はらからのきみたちあまたさぶらひたまひて、いとをかしきことにこそ、とて返事せよ、などありしもわりなき心ちして

f 君を我思はざりせばわれをきみおもはむとしもおもはざらまし (八六)

祭のひ、御前に人ずくなにてさぶらふに、葵に御てならひをせさせ給ひて

ゆふかけておもはざりせばあふひぐさしめのほかにぞ人をきかまし (四五五)
おほむかへしきこえむはゆければ、ゆふを御み丁のかたばらにゆひつけ
てたちぬ

しめのうちをなれざりしよりゆふだすき心はきみにかけてしものを (四五六)

eは『和泉式部集』にも見え、寛弘六年(一〇〇九)頃に和泉式部が初出仕した際、相手をするよう彰子が伊勢大輔に求めたもの、fは、彰子が手習の形で好意を示し、和泉式部が返歌を木綿に書いて御帳台の帷子につけたという場面である。彰子が女房たちを気遣いながら人間関係を円滑にしていたことがうかがえる。

後年紫式部と伊勢大輔が偶然同日に清水参詣をした際、彰子を主君とする幸せを詠み合った歌が『伊勢大輔集』に見える。

とうしきぶきよ水にまゐりあひて、御まへのれうに御あかしたてまつるを
ききて、しきみのはにかきておこせたりし

ころざし君にかかるともし火のおなじ光にあふがうれしさ (八一)

かへし

世世をふる契もうれし君がためとす光にかけをならべて (八二)

女房たちにこのような感慨をもたらしたのも、彰子の女主人としての能力の高さではないだろうか。また、彰子は崩御に際しても、自らに仕えた女房が不本意な形で散り散りになることを避け、土御門第の西の院に留まれるよう処置したという(『采花物語』巻三十九布引の滝)。彰子と女房集団の強い絆がうかがえるエピソードである。

三、彰子サロンにおける女房主体の文化活動

実際に彰子サロンの女房集団はどのような文化的な営みをしていたのだろうか。当時のサロンの活動には、歌合の開催、物語(絵を伴うものを含む)の制作といった文学的成果のほか、対外的・対内的な詠歌も含める必要がある。『紫式部日記』が大斎院サロンで詠まれた和歌について言及するように、和歌はそのサロンの文化レベルを示す指標であったと考えられるからである。

『御堂関白集』は、彰子女房の視点でまとめられたものであることが指摘されている。彰子のもとには、中納言の宣旨の局から紅梅が(九番歌)、進の内侍から撫子が献上され(三二番歌)、それぞれ彰子の命で女房が返歌するなど、四季の風流を好むサロンの様子が知られる。そのほか、彰子の御殿を訪れた貴人と女房のやりとりも多

く残されている。

- a ふちつぼの戸口にあつまりてものがたりなどするほどに、かの頭中将、まゐり侍りつるかひありてうれしく侍るわざかな、と云ひて、歌うたひもの誦じなどするほどに、春宮よりまづ参りたまへとあれば、わりなしとて、ただ今またかへりまゐらむ、しばしまたせたまへ、とてたちぬ、おくのかたより、いづら、おはしつる人はたちたまひぬるかとあれば、春宮へ、とく今まゐらむとてありつるといへば、こころの事やとて
- 霞立つ春のみやにといそぎつる花心なる人にやあるらむ (五)

と云ふほどにおはしたり、かくこそといへば

へだてける心もしらで春霞うしろめたくも立ちにけるかな (六)

家集の配列から寛弘元年(一〇〇四)の詠で、女房たちのもとを訪れた頭中将(源経房とされる)が、折に合う詩歌を口ずさむ。東宮に呼ばれて中座した頭中将を女房が「花ごころなる人」と呼び、頭中将が軽い恨みの歌を詠む。『枕草子』の日記的章段に似た題材であるとの指摘があるように、貴人との風流な交流を示すものである。

伊勢大輔も彰子サロンを代表する歌人であった。彰考館本『伊勢大輔集』に、寛弘四年(一〇〇七)春のこととみられる著名な歌がある。

- b 女院の中宮と申しける時、内におはしましに、ならから僧都のやへざくらをまゐらせたるに、今年のとりいれ人はいままゐりぞとて紫式部のゆづりにしに、入道殿きかせたまひて、ただにはとりいれぬものとおほせられしかば

いにしへのならのみやこやへ桜けふ九重にほひぬるかな (五)

とのの御まへ、殿上にとりいださせたまひて、かむだちめ君達ひきつれてよろこびにおはしたりしに、院の御返

ここのへにほふをみれば桜がりがさねてきたるはるかと思ふ (六)

彰子の歌とされる六番歌は紫式部が代詠したものらしい(『紫式部集』一〇三番歌)。また同集によって、一条天皇の崩御に伴い内裏を去った彰子のもとを訪れる殿上人の存在から、寛弘年間の彰子の御殿に殿上人が多く近侍していたことが知られる。

- c 三条院御時、院の里におはしまし時、ごせちにむかしおぼえて殿上人ひきつれていたりし中に

はやくみし山井のみづのうはごほりうちとけさまはかはらざりけり (一二三)

『後拾遺集』(一一二〇)から寛弘九年(一〇一一)十一月の歌とされる。訪れた殿上

人も彰子女房も、一条天皇在世の頃を懐かしんだものであるう。

長和年間(一一一二)、既に皇太后となった彰子サロンには、妹の妍子の女房が参上することもあった。やはり彰考館本『伊勢大輔集』に、

- d 月あかきよ、院の御まへのおもしろきにとて皇太后宮の女房たち、むつまじき殿上人たちにかくされてまゐりたりしに、かげのほのぼのみえしに、ものいひにやれとおほせられしに

うきくもはたちかくせどもひまもりて空行く月のかげをみるかな (七)

かへし、まさみち

浮雲にかくれてこそ思ひしかねたくもひまのりにけるかな (八)

とあり、妍子女房が殿上人の後ろに隠れて参上してきた際、彰子が伊勢大輔に詠歌を求め、雅通が答えたものとなっている。彰子と妍子の姉妹の仲の良さは『御堂関白集』にも見え、それぞれの女房たちの交流も盛んであったものとみられる。

次に、彰子が関係する半ば公的な場において、彰子サロンの女房たちがどのように風流な営みを支えていたか挙げていきたい。

『赤染衛門集』には次のような例がある。

- e 京極殿のいけにかがり火ともして、人人小舟にのりてあそぶ、蔵人為資がかちとりしたるにやる

浪さわぐ風にまかせてゆくふねのほかげにみゆるかち取やたれ (一一九)

返し

おもへどもいはねのうらをこぐ程はいそのなのりぞせられざりける (一二〇)

『赤染衛門集全釈』が長保二年(一〇〇〇)彰子立后の大饗としているのに従う。京極殿の池に舟や筏を浮かべる大掛かりなイベントで、女房たちも船遊びを楽しんだ。

寛弘五年(一〇〇八)に敦成親王が誕生した際の一連の流れは『紫式部日記』に詳しく、産養や行幸といった行事において女房が実務的な役割を果たしていたことが知られるが、サロン活動としては内裏還啓が近づいた十一月に行われた御冊子作りを挙げておきたい。

- f 御前には、御冊子づくりいとなませたまふとて、明けたてば、まづむかひさぶらひて、いろいろの紙選りとのへて、物語の本どもそへつつ、ところどころにふみ書きくばる。かつは綴じあつめたむるを役にて、明かし暮らす。

前述のように道長は物語に注目していたが、ここでは紙や筆を提供する後見の立場に留まり、彰子主導で紫式部を中心とした女房集団が行ったものとみられる。内裏還

啓に際しての御冊子作りであるから、半ば公的な意味があつたものであろう。この物語は『源氏物語』と考えられており、壮麗な冊子に仕立てることは、彰子が自らのサロン活動の成果として『源氏物語』を捉えていたことの現れであろう。

このほか彰子サロンにおける女房集団の活躍が見られる例として、長元五年（二〇三二）十月十八日に行われた上東門院菊合が挙げられる。彰子が法成寺において念仏法要を営み、高陽院に還啓するにあたり女房が左右に分かれて菊合を催し、高陽院に還御した翌日、上達部・殿上人を念人として歌合を開催したものである。伊勢大輔（左の頭であつたことが家集から知られる）・弁乳母（紫式部の娘賢子）・小弁といった歌人たちが左右に分かれて歌を詠み、女房の手による仮名日記も残されている。仮名日記によれば、仏前に植えた菊の歌を女房たちが詠んだことが契機であつた。当時彰子サロンで歌合が行われていなかったことは、彰子が「あはするにてはおもひもあへぬこともあらむものを」と消極的であること、歌を詠んだ女房たちが「いとかはらいたうはしたなきこともありなむかし」と思いながら参加したことからもうかがえる。しかし注目すべきなのは、内裏歌合が見られなくなった時期において、私的な営みとはいえ準備期間もなしに歌合ができるほどの歌を詠み、それを仮名日記に残す文才がある、彰子女房の文学的レベルの高さである。長元四年（一〇三一）九月の上東門院住吉詣においても、天王寺で彰子の和歌の詠作があり、天の河で女房が数多く和歌を詠んだことが記録として残る（『栄花物語』卷三十一殿上の花見）。この頃の彰子のもとには詠歌にすぐれた女房が集つていたのである。この菊合の後、頼通主宰の歌合が数度に渡つて開催されるが、頼通の歌合への情熱の契機にこの菊合があつたことは、既に萩谷氏が指摘しており、彰子サロンが文化を湧出する場として機能していたことが明らかになる。

四、次世代へ伝わる彰子サロンの営み

彰子女房の中には、母娘で女房として仕えた例もみられる。和泉式部の娘小式部内侍、また遅くとも治安三年（一〇二三）には、紫式部の娘賢子も彰子のもとに出仕していた。²¹次に挙げるのは『大式三位集』端白切に見える源朝任との贈答である。

おなじ人、くろどのかたにたちあかして、つとめて

しるらめやまやのとのどにあくるまであまそゝきしてたちぬれぬとは（八）

かへし

いとほしとなにしか、けんあまそゝきまやのとのどにぬるときくく（九）

この贈答以前に催馬楽「東屋」の「雨そそき」を詠んだ和歌は『源氏物語』に見られるのみで、朝任が『源氏物語』を念頭に置いて和歌を詠んだことは明らかである。このように賢子は『源氏物語』の詞や場面を取り込んだ歌を詠むことで、作者の娘としての周囲の期待に応えていたことが指摘されている。²²その後賢子は後冷泉天皇の乳母となるが、それは彰子サロンの文化的成果が、彰子の血縁に列なる次世代のサロンへと引き継がれていくことにほかならない。²³その賢子の働きは、後冷泉天皇の御代について「弁の乳母をかしうおはする人にて、おほしたて慣はし申したまへりけるにや。」（『栄花物語』卷三十六根あはせ）と見えることでもうかがえる。

当初彰子に仕えた女房が、血縁に連なる別の主人に出仕した例として、ほかにも出羽弁や祐子内親王家小弁が挙げられる。出羽弁は『栄花物語』や『経信母集』後記などによって、当初彰子のもとに出仕し、その後威子、さらにその所生の章子内親王に仕えたことされる。前述のように『出羽弁集』によつて章子内親王のサロンの一員として活躍し、『栄花物語』に歌が頻出していることから、成立に関わりがあつたと推定されている。小弁は、長元四年（一〇三一）の上東門院住吉行啓に随行した小弁と同一人と考えられており、六条斎院祿子内親王の物語合において、頼通が他の作品をとどめてまで提出を待ったという逸話をもつ。

また、伊勢大輔の娘には四条宮寛子に仕えた筑前（康資王母）²⁴がおり、家集にも四条宮と交流があつたことが記されている。中でも注目されるのが、『伊勢大輔集』に見られる、次の贈答である。

皇后宮よりならのやへざくらをたまはせてかく

これやこのならのみやこのやへざくらにほひもかずもしられざりけり（一七）

御かへし

おもかげは見しにかはらでやへざくらいろはむかしの心地こそすれ（一八）

母伊勢大輔の著名な歌を念頭に置いていることは明らかである。この贈答は早くても天喜年間（一〇五三〜一〇五八）のものともみられ、五十年にもわたつて伊勢大輔の八重桜の歌が語り継がれていたことがわかる。

彰子のもとには、女院となつてからも「かたちを好ませたまひて、今もよき若き人ども参り集まりて、めでたくあらまほしき御有様なり。」（『栄花物語』卷三十一殿上の花見）とあるように、その後の後宮サロンを形成した若い女房たちが集つていた。彰子サロンには次世代の女房を育てる働きもあつたのである。

おわりに

以上、彰子サロンの文化的営みを女房集団の活動という視点から考察した。当時の後宮サロンでは、女房集団が文化的営みを主導することが多く、女主人に求められたのは強い指導力というより、女房集団の人間関係を気を配りまとめる能力であった。若くして入内した彰子のサロンも、道長と倫子の支援を受けながら、女房集団が文化的な活動を営んでいた。彰子サロンに属した女房の家集によって、彰子が中宮から皇太后、太皇太后を経て女院に至る長い期間に渡って、公私様々な営みが女房集団を中心として行われていたことが明らかになる。この文化的な営みは、彰子の血縁に列する主人に仕えた女房によって、次世代のサロンに引き継がれた。

彰子の弟頼通が安定的な政権を保った時代には、融和的な後宮サロンが営まれ、歌合等においての女房たちの相互交流も盛んであったと考えられている。その次世代のサロンを形成する核となっていたのはもともと彰子に仕えた女房集団であり、彰子女房がつなぐネットワークによって、物語制作や歌合の隆盛といった新たなサロンの文化的営みもたらされたといえる。彰子サロンは、文化を湧出し次世代に伝える女房集団を生み出していたのである。

注

- (1) 『御堂関白集』『四条宮下野集』といった私家集にもそのような要素がある。
- (2) 神野藤昭夫氏「散逸物語『岩垣沼の中將』の復元」(『散逸した物語世界と物語史』若草書房一九九八年)は、六条齋院物語合で提出された宣旨自身の作『玉藻に遊ぶ権大納言』をはじめ女別当の『霞へだつる中務宮』、小弁の『岩垣沼の中將』が、『狭衣物語』に影響を与えたと指摘する。
- (3) 清水婦久子氏「源氏物語の成立と巻名」(『源氏物語の展望』第九輯 三弥井書店 二〇一一年)は、『源氏物語』が「作者一人の知識や着想だけで創作されたものではなく、和歌活動が活発に行われた文化的ネットワークの中から生まれた」ものと指摘する。
- (4) 加藤静子氏『赤染衛門集』の女房たちと『栄花物語』(『王朝歴史物語の方法と享受』竹林舎 二〇一一年)の指摘による。

(5) 酒井みさを氏『上東門院の系譜とその周辺』(白帝社 一九八九年)。

(6) 三田村雅子氏「女性たちのサロン——斎院サロンを中心に」(国文学解釈と教材の研究 第三十四巻十号 一九八九年八月)。

(7) 二条院宣旨については、拙稿「中宮宣旨の一考察——威子・章子内親王に仕えた宣旨——」(平野由紀子氏編『平安文学新論——国際化時代の視点から——』風間書房 二〇一〇年)参照。

(8) 目加田さくを氏『平安朝サロン文芸史論』(風間書房 二〇〇三年)。

(9) 加藤静子氏「赤染衛門の女房職、家集と『栄花物語』」(『王朝歴史物語の方法と享受』竹林舎 二〇一一年)は、赤染衛門が倫子のもとに出仕し、倫子が道長と結婚することで道長に仕え、子女たちのなかでは彰子に仕えていたことを明らかにしている。

(10) 三田村雅子氏前掲論文。

(11) この歌群については別稿の準備がある。一三六番歌「けぢかうみるをむなつしを」は不明一三八番歌「こくからに」は、『赤染衛門集全釈』(風間書房 一九八六年)が「かくからに」とするのに従って解釈した。

(12) 『赤染衛門集全釈』が「ゆかりなりしは」とするのに従って解釈した。

(13) 底本「さとにあるはは」とあるが、『赤染衛門集全釈』が「さとにあるはる」とするのに従う。

(14) 斎藤正昭氏「紫式部伝 源氏物語はいつ、いかにして書かれたか」(笠間書院 二〇〇五年)句点があるものと解した。

(15) 平野由紀子氏『御堂関白集全釈』(風間書房 二〇一二年)、山村英理子氏『御堂関白集』の編纂について(国文 百十九号 二〇一三年七月)。

(16) 森田奈々氏「御堂関白集の基礎的研究」(国文 九十三号 二〇〇〇年七月)。

(17) 『伊勢大輔集』は久保木哲夫氏『伊勢大輔集注釈』(貴重本刊行会 一九九二年)を参照した。

(18) 久保木哲夫氏「上東門院菊合序とその性格」(講座平安文学論究 第五輯 風間書房一九八八年)、萩谷朴氏「上東門院菊合」の研究(十巻本『歌合』巻五所収本の書誌・評釈——古代文化 四十巻九号 一九八八年九月)、同氏『平安朝歌合大成 増補新訂』(同朋舎出版一九九五年)。なお本文は萩谷朴氏の翻刻に拠った。

(19) なお、目加田氏は、彰子サロンの活動として『栄花物語』巻十九御裳ぎに見える、治安三年(一〇二二)八月の土御門邸での歌会を挙げる。男性貴族の詠んだ「秋月光清」「池水長澄」の二題の後に、女房の歌が一首のみ見える。目加田氏は「時に、彰子のもとに、これら貴公子達相手に、堂々と詠み出される才媛女房不在であったか」と述べるが、酒などのもてなしがあつたあとの歌会に、女房が同席していたとは考えにくい。この女房の歌が二つの歌題を合わせたものであることも、本来女房がその歌会の参加者ではなかったことを裏付けよう。この他、彰子の中宮大饗でも歌会が行われたことが『御堂関白記』によって知られる。男性貴族を中心とした文化的な営みが彰子のもとで行われた事実は注目すべきであるが、女房集団を中心とした今

回の考察からは除いた。

(21) 拙稿「大式三位賢子の出仕時期―女房呼称と私家集から―」(和歌文学研究 百四号 二〇一二年六月)。

(22) 『新編私家集大成』大式三位Ⅱに拠り、私に濁点を付した。

(23) 中周子氏「大式三位賢子の和歌―贈答歌における古歌撰取をめぐって―」(樟蔭女子短期大学紀要 文化研究 十三号 一九九九年六月)。

(24) 注21拙稿参照。

脱稿後、加藤静子氏「二写本からの贈り物」(むらさき 第五十輯 二〇一三年十二月)を拝読した。学習院本『栄花物語』によって、出羽弁が威子出仕以前に彰子に仕えていたことの有力な証が崩れるとの指摘である。

A Study of Jōtō Mon'in FUJIWARA no Shoshi's Salon —ladies-in-waiting in a place creating culture—

MOROI Ayako

Abstract

Here I investigate Jōtō Mon'in FUJIWARA no Shoshi's salon. A salon here is defined as the place where cultural activities are performed mainly by a master and ladies-in-waiting. Famous ladies-in-waiting, such as Akazomeemon, Murasakishikibu, Isenotaifu, and Izumishikibu, had served Shoshi. The big salon was constituted by them. In the salon of the court of this era, ladies-in-waiting led cultural activity in many cases. What was needed for a landlady was the capability to take care of human relations between ladies-in-waiting instead of strong leadership. It became clear with the private anthology of waka poems of the ladies-in-waiting belonging to Shoshi's salon that the ladies-in-waiting performed cultural activity in her salon, supported by Michinaga and Rinshi who are Shoshi's parents at the beginning. This activity was taken over to the next-generation salon from the mothers ladies-in-waiting to the daughters ladies-in-waiting who served Shoshi and the masters of her blood relatives. It can be said that cultural activities of a new salon, such as making tales and Utaawase, became in full flourish because of the network which Shoshi, ladies-in-waiting connected.

Key words: FUJIWARA no Shoshi, salon, ladies-in-waiting, monogatari (tales), shikashu (private anthology of waka poems)